

総 説

領域「表現」における苦手意識の克服と解消に関連する 『絵を描くこと』の教育実践について — 保育者養成教育課程を中心に —

鷺崎 公彦*

＜要 旨＞

本論は、造形表現に対する苦手意識の主な要因の一つである「絵を描くこと」を取り上げ、保育者を目指す学生の「苦手意識の克服と解消」を目的とした教育実践について、その内容を類型化して紹介する。また、分析と考察をもとに、今後の教育活動において配慮すべき点について検討する。

まず、実践の方法別に「素描系」「形態認識系」「イラスト系」「抽象系」「技法系」「素材系」「壁面装飾系」の7系統に分類した。そして、13件の研究対象を『目的』『方法』『成果』『課題』の4項目で整理し、各系統の特徴や特性を検証した。

結果、描画に関する表現方法および指導方法について、「写實的」「科学的」「簡易的」「感覚的」「過程的」「身体的」「共感的」の7つのアプローチ法を明らかとした。さらに、保育者養成の造形教育における「絵を描くこと」の段階的な到達目標として、「標準的到達点」と「理想的到達点」について検討した。

キーワード：保育者養成、造形表現、苦手意識、克服と解消、描画

I. はじめに

1. 研究の目的

保育者を目指す短期大学生は、2年間の短い保育者養成教育課程（保育士養成および幼稚園教諭養成）のなかで、保育現場の即戦力として様々な知識や技能を習得する必要がある。

特に、領域「表現」における造形表現分野は、学生個人の資質を拠り所とせず、負担の少ない効率的かつ効果的な「学びある遊び（造形遊び）」による造形能力の育成と向上、および成功体験の提供が継続的な課題の一つである。

同時に、今後注目したいテーマとして、造形表現に対する「苦手意識」が挙げられる。保育者養成などの短期集中型の教育活動において、学生一人一人の主体性や積極性が果たす役割は非常に大きい。それゆえ、学生が抱く苦手意識というネガティブな心

理・感情は、個人の問題ではなく、保育者養成全体の課題として克服と解消に向けた取り組みが必要不可欠である。

本論は、造形表現に対する苦手意識の主な要因の一つである「絵を描くこと」を取り上げ、保育者を目指す学生の「苦手意識の克服と解消」を目的とした教育実践について、その内容を類型化して紹介する。また、分析と考察をもとに、今後の教育活動において配慮すべき点について検討することを研究目的とする。

2. 研究の背景

保育者養成学生の「図画・工作（造形活動）」に関連する内容の意識について、照沼晃子は、質問紙調査の結果から次のように指摘している。

「大学入学時までには造形活動に対して、多少なりとも嫌悪感を抱いてしまった学生が半数前後いる。

*西南女学院大学短期大学部保育科

一方で、ほぼ全員が子どもに対して好感を持ち、子どもと関わることを指向している。同時に将来の保育関係の職業への就労意識も高く、且つ具体性を持っている。」¹⁾

つまり、保育者養成学生における絵や工作の造形活動に対する苦手意識の特徴とは、「美術を専門としない学生が保育関係の職業への就労を選択した結果に伴って表出する消極的な意識」と言える。換言すれば、学生の「誰もが共通に抱える悩みや不安」とも言えよう。そのため、養成校には、苦手意識を全面的に受け止めて、学生達が前向きな姿勢と態度を取り戻すための仕組みや手立てが求められるのである。

また、苦手意識に関する詳しい実態や状況について、花田千絵、泰田久史、清見嘉文、船木美佳、山中慶子は、アンケート調査の結果から次のように報告している。

- ・「絵を描くことに対して苦手意識を持っている学生が4割いることがわかった。」²⁾
- ・「苦手意識を持っている学生のほとんどは絵を描くことがネックになっている。」³⁾
- ・『苦手意識の原因の多くは「絵が描けない」又は「絵が下手」ということにあった。』⁴⁾
- ・『教科「美術」が嫌いな理由は、(中略)「絵が上手く描けないから」をあげる学生が70%以上いて、特に「描画」に対する苦手意識が高いことが判る。』⁵⁾
- ・『嫌いな活動の種類は「描画・イラスト」を挙げた学生が(中略)調査人数の半数以上を占める結果となった。』⁶⁾

なお、山中は、絵を描くことについて「保育の現場では、文字が読めない子や、言葉では説明するのが難しいことを図で示したりする場面が多々ある。簡単なイラストが描けることや、物の形を線で表す力の獲得は、保育者としての自信に繋がる」⁷⁾と述べ、苦手意識のみならず「保育者の資質」の一つとして捉えている。

このように、「絵を描くこと」と「苦手意識」との間には深刻な因果関係が認められ、与える影響も極めて大きい。このような実情に伴い、その克服と解消を目的とした研究が数多く報告されてきた。ところが、成果をまとめた論考は少なく全体像を捉えにくい状態が危惧される。

以上の現状に注目し、「苦手意識の克服と解消」に関連する「絵を描くこと」の教育実践を分析・考

察し、今後の教育活動について検討したい。

3. 研究の対象

分析と考察を行うにあたり、研究対象の抽出作業を行った。

第1に、国立国会図書館サーチ、CiNii ResearchおよびGoogle Scholarなどを用いて、「保育者養成」「描画」「苦手意識」といった当研究との関連度の高いキーワードから論文検索を行った。

第2に、該当論文を実践の方法別に分類した結果、7つの系統にまとめることができた。内訳は、以下の通りである。

1. 素描系
2. 形態認識系
3. イラスト系
4. 抽象系
5. 技法系
6. 素材系
7. 壁面装飾系

「素描系」は、描写表現の基礎の一つであるデッサンの実践法。「形態認識系」は、日常で目にする動物や植物を描く実践法。「イラスト系」は、イラストやカット、挿絵等による実践法。「抽象系」は、具体的な形のないテーマや題材を表す実践法。「技法系」は、絵画技法のモダンテクニックに関する実践法。「素材系」は、絵画表現で用いる材料や道具に関わる実践法。「壁面装飾系」は、室内空間の広い壁面を装い・飾る実践法である。

第3に、実践内容に関して、次の2つの観点から各系統の代表的な論文を選定した。1つ目は、『目的』『方法』『成果』『課題』への明瞭、かつ具体的な言及がなされていること。2つ目は、系統毎の特徴および特性を端的に捉えると同時に、高い独創性を有していること。

このような視点に立ち、本論では7系統、13件の実践報告を研究対象とする。

4. 研究の方法

上記の研究対象を『目的』『方法』『成果』『課題』の4つの項目で整理し、各系統に見る特徴や特性を分析、考察する。そして、教育実践の概要について捉えることを研究方法とする。

Ⅱ. 分析

1. 素描系

「素描系」では、宿輪忍生⁸⁾と花田千絵⁹⁾の研究について取り上げる。

宿輪の『目的』は、2年間で動きのある人物が描ける描写力を身につけることを一つの指導目標とし、「略画Ⅰ - 人物」の授業実践の調査・分析と結果から、描写力向上のための指導法について考察するものである。

『方法』には、2回の調査を実施する。

第1に「調査1」として、事前指導や条件を一切設けずに、各人自由に15分間で「走る人」を描く。その結果を実践者の判断で、A（良）、B（可）、C（不可）に分類する。

第2に「調査2」として、「略画Ⅰ - 人物」を指導後、次週に何も資料を見ないで15分間で「走る人」を描く。その結果を再度、A、B、Cに分類し、「調査1と2」の絵の比較を行う。授業内容を以下に記す。

- 一. 1コマ、90分で行う。
- 二. 人物模型で人間のプロポーション、関節の動く所、前・横向きの角度を説明する。等
- 三. プロポーションを理解し、資料を見ながら固まりと棒で基本形を描く。
- 四. 肉付けして具体的な人間にする。
- 五. 資料の例を見ながら様々なポーズを描く。
- 六. 自分でポーズを考え、棒人間から具体的な人間を描く。
- 七. 宿題として、幼児と大人（親、先生など）を場面設定して描いてくる。
- 八. その後の授業でもう一度「走る人」を描く。

最後に、学生の実態についてアンケートによる意識調査を行った。

『成果』として、全体の61.4%の学生に授業の成果が見られた。一方、31.4%^{注1)}の学生には上達がほぼ見られず、「絵を描く力は必要、上手になりたいしもっと練習をしたい。授業はよく分かり理解できたし前より描けるようになった。でも人物画は本当に難しい。まだまだよく描けない。」という学生が多いことが分かった。

『課題』について、指導法に関する授業改善と研究の継続を挙げている。

花田の『目的』は、図画工作の基礎力向上に向け

た教育実践の課題を明確化するため、図画工作に対する意識と学習到達度の関連性について解釈的アプローチにより分析、考察するものである。

『方法』には、2つの調査を実施する。

第1に「図画工作に関する意識調査」として、好悪心理などについてアンケート調査を行う。

第2に「学習到達度に関わる検証」として、鉛筆デッサンを行う。授業内容を以下に記す。

- 一. 1コマの授業で行う。
- 二. 白色の直方体（発泡スチロール材）を一人一個配布し、画用紙に鉛筆でデッサンする。
- 三. 一斉指導により、線描の遠近法による形の捉え方を説明する。
- 四. 次の段階として、明暗法による立体感の表し方を説明する。
- 五. 学生がデッサンを行っている間、実践者は机間巡視をし、質問や相談に答える。
- 六. 説明が理解できていない場合など、個別指導を行い、全体的に偏りのない指導を行う。

デッサンの評価は、①線により立体感が表現できているか。②明暗により空間表現ができているか。以上の2点から、実践者の判断でA、B、Cの三段階に評価した。

『成果』として、図画工作に対する好き嫌いの意識と学習到達度は関連性があるとし、教育実践の課題について「絵を描くことに対しての苦手意識を払拭すること」と結論づけた。また、今回の課題に取り組む姿勢に関して、苦手意識がある学生も意欲的であったとした。その要因を、①モチーフが単純形体であること、②目標が明確であること、以上の2点と評した。

『課題』について、描写力が問われない絵画技法の学習と、描写力の基礎力向上の学習とを組み合わせるなど、苦手意識のある学生が抵抗感なく取り組める課題設定の方法を挙げている。

人物を描写対象に「プロポーションや動き」を捉える宿輪と、幾何学形態を対象に「遠近法や立体感」を描写する花田の教育実践は、絵を描く表現活動において「写實的」なアプローチ法と言える。その特徴は、描写に関する知識と技能の習得を目的とし、描写力に関わる訓練を方法とする。成果と課題において、到達目標との比較から、巧拙性や上達の度合いなどの客観的な指標によって評価する。

利点として、苦手意識と描画力の根深い関係性に

において、描写の基礎力向上によりその克服へと直接的に働く有効性が期待できる。反面、描写対象の程度によっては、成功までの難易度が高く苦痛を伴う可能性が推察される。

以上の「素描系」に見る指導法を「写実」に特化した描画方法とする。

2. 形態認識系

「形体認識系」では、長根利紀代¹⁰⁾の研究について取り上げる。

長根の『目的』は、学生の絵画に見る保育者としての資質の現状と、表現能力を把握するとともに、学生自身が自己の能力や価値観、保育における事物の表現方法などに気づき、自らの資質向上に向かう手がかりについて実践、考察するものである。

『方法』には、2回の授業を実施する。

第1に「第1回目」として、提出を予告せずに、不要な印刷紙（B4サイズ）の裏にクレヨンを使って20分間で自由に絵を描く。次に、次回授業までに今回描いたものの実物に触れてくるよう指示し、再度、絵を描くことを予告する。触れられない場合は、写真・絵画・文献などの実物に近い資料をよく観察する。

第2に「第2回目」として、第1回目と同じテーマで絵を描くよう促す。時間は前回と同じとし、用紙は未使用の印刷紙で材質やサイズは前回と同様とする。

最後に、感想と併せて提出するよう指導し、描写対象の分類、実践者による「1と2」の絵の比較、感想の内容をまとめた。

『成果』として、事物との出会いをきっかけに、平面的で簡略化した（マンガ的かつアニメ的な）自己の表現や価値観を自覚し、実物の形態や色彩などを表現しようとしたこと。また、観察の方法やものとの関わり方に気づき、様々な発見や驚きと物事への見直し、感情表現をも意識することを通して、保育者としての在り方や学習の前向きな姿勢が見受けられたとした。

『課題』について、描写表現に対する戸惑いや苦手意識も見られ、形が判別しにくい作品や線が細い、紙の片隅に小さく描くといった自信のなさや考えすぎる傾向も見受けられた。描写表現に無頓着で投げやりになった作品もあったとし、こうした「表現」等を含む、学生指導を挙げている。

「形態認識系」を補足するために、高橋弥生・おかもとみわこ¹¹⁾、高木義栄ら¹²⁾、宮崎百合¹³⁾の研究についても取り上げたい。

高橋・おかもとは、学生の飼育や栽培に関する体験および子どもの頃の遊び体験の調査と、その体験が描く動植物のイラストに与える影響について、実態・実技調査を行った。

一方、高木らは、学生が描いた身近な生物の絵と、過去の自然体験に関するアンケート調査の結果との関連性について、実技・実態調査を行った。

結果、高木らは、学生の生物形態認識力は先行研究の頃（2000年代初頭）より低下していると指摘し、その傾向や要因の究明を挙げている。他方、高橋・おかもとは、飼育や栽培の体験が生きてこない要因を、①生活に密着していない、または自分が中心となって世話をしていない。②観察するための興味関心が薄い。③イラストに描くための技術が未熟。以上の3点と推測し、正しい心・知識・観察力を育てるより良い教育環境の整備を挙げている。

宮崎は、「よく知っているつもり」の動物を正しく描写できるかについて実技調査を行った。方法は、線のみで描かれた白い熊の絵を配布し、鉛筆を使って10分間で「本物のパンダの模様」を描き加えるもの。

結果、「全身まだら模様」に塗る学生が13.8%にのぼることが分かった。一番考慮すべきは、実はよく知らないのに「知っているつもり」でいることの怠慢さに気づかないことと危惧し、自主的な事前学習の必要性などを挙げている。

動植物を描写対象に「形や特徴」を写し取る長根の教育実践は、絵を描く表現活動において「科学的」なアプローチ法と言える。その特徴は、生き物に関する理解や関心、観察の学習を目的とし、描写力・観察力に関わる練習を方法とする。成果と課題において、実物という手本との比較から、正誤性や向上の度合いなどの客観的な指標によって評価する。

利点として、「素描系」と同様に、描写や観察の基礎力向上により苦手意識の克服へと直接的に働く有効性が期待できる。反面、描写内容のレベルによっては、成功までの道のりが険しく苦痛を伴う可能性が推察される。

以上の「形態認識系」に見る指導法を「科学」に

特化した描画方法とする。

3. イラスト系

「イラスト系」では、泰田久史¹⁴⁾と清見嘉文¹⁵⁾の研究について取り上げる。

泰田の『目的』は、苦手意識の軽減と与える意欲的な取り組みや作品内容の充実、そして、幼児教育の指導者としての基礎力向上について実践、考察するものである。

『方法』には、4つの取り組みを実施する。

第1に「図画工作の授業についての意識調査」として、苦手意識と意欲についてアンケート調査を行う。

第2に「絵に対する苦手意識を緩和する取り組み」として、絵の描き方の指導を行う。授業内容を以下に記す。

- 一、人物、動物、花・果物の描き方をゆっくりと進める。
- 二、最初は、赤ちゃんの顔や動物の顔など部分的に始める。
- 三、描きやすい簡単な「イラスト調」のものから始める。
- 四、慣れてきたら少し角度を変えたり、名前をつけるなど、絵に親しみが湧くようにする。
- 五、描いた作品には赤で丸をつけたり、親しみやすい一言コメントが付いたスタンプを押すなどの安心感がもてる工夫をする。

第3に「絵以外の制作」として、折り紙、切り紙、ミニ制作（折り紙を利用したおもちゃ）、身近な素材を利用した作品作り、粘土造形、絵本作りを行う。

最後に、1回目の意識調査と同じ方法で、苦手意識と意欲を調査し、授業前後の意識の変化を分析した。

『成果』として、苦手意識の低減と意欲向上への変化が出たとし、特に意欲に関して「ない」と答えた学生が一名もいないことが分かった。付け加えると、全体で、苦手意識では「ない」が15.2%増加し、「ある」が15.7%減少した。意欲では「ある」が14.0%増加し、「ない」が5.8%減少している。^{注2)}

『課題』について、地元の素材や伝統工芸を教材に取り入れるなど、さらなる授業の改善と工夫を挙げている。

清見の『目的』は、造形表現に対する苦手意識に

着目し、その克服を目指す指導の在り方について実践、考察するものである。

『方法』には、5つの題材を実施する。

ここでは、題材1の「マイキャラクター～形に命を吹き込もう～」を特筆したい。これは、あえて絵を描くことに焦点を当て、描く抵抗感の減少から絵に表す楽しさへと関連づけている。学習内容を以下に記す。

第1に「形みつけ～身近な形から思いついて～」を行う。

- 一、例示を見て、身近な持ち物から「単純な形（一筆描きで捉えることのできるような形）」を1つ選び、試し紙に描く。
- 二、描いた形に目を描き入れる。必要があれば、口や鼻も描き加える。（無表情な形に、感情や命を感じる表現を行う。）
- 三、さらに、手や足を付け加える。（動きが生まれる表現を行う。）
- 四、1つの形に命を見出すことができれば、様々な形を見つけて命を吹き込んでいく。

第2に『形みつけからの発展～表紙絵「○○君の大冒険」～』を行う。

- 一、命を吹き込んだ形の中からお気に入り1つを選び出し、物語の主人公とする。
- 二、名前を付け、住んでいる所や好きな食べ物などを考える。（性格付けする表現を行う。）
- 三、その主人公の「冒険」をテーマにした表紙絵を制作する。
- 四、色鉛筆やカラーペンなどを使って彩色し、仕上げる。

最後に、全作品を画像に残し、スライド上映による鑑賞会を行う。

題材2～4では、クレヨンとクレパス、コンテとパステル、絵の具をそれぞれに用いた「技法体験」や、題材5は「切り絵」を行った。

『成果』として、苦手克服や前向きな姿勢と態度を示す学生の感想が寄せられたとした。

『課題』についての記述は見当たらなかった。

人物や動植物を描写対象に「簡単なイラスト」で描く泰田と、キャラクターを対象に「シンプルな表紙絵」で表す清見の教育実践は、絵を描く表現活動において「簡易的」なアプローチ法と言える。その特徴は、描写に関する技術の習得から自由な描画表現まで目的は多様、かつ描写力に関わる練習や造形遊

びなど方法も幅広い。だが、成果と課題において、学生の発想や意欲を尊重し、本人の自己肯定感の度合いという主観的な指標によって評価される点で共通する。

利点もまた「素描系」と同じく、描写の基礎力向上により苦手意識の克服へと直接的に働く有効性が期待できる。なお、目立つ欠点が散見されない点についても特記しておく。

以上の「イラスト系」に見る指導法を「簡易」に特化した描画方法とする。

4. 抽象系

「抽象系」では、葉山登¹⁶⁾と河合規仁¹⁷⁾の研究について取り上げる。

葉山の『目的』は、心と身体を動かすことをキーワードとして、保育に置き換わる表現を目指し、横断的・総合的に学ぶ発想を培うことと、自己規制の殻を破ることについて実践、分析するものである。

『方法』には、6つの題材を実施する。

題材1は、「植物」を描く。実践以前の学びの意識化と、以後の変化の指標とする。

題材2は、「6つの丸と、プラス1つの丸」を描く。以下、題材展開をまとめた。

- 一. 無条件で丸を描く。
- 二. 情景をイメージして丸を描く。
- 三. 平たい丸を描く。
- 四. 立体的な丸、球体を描く。
- 五. 重く、固い立体の丸を描く。
- 六. 生きている丸を描く。
- 七. 鑑賞
- 八. 丸い空間に包まれている自己をイメージして描く。

題材3は、「方向のある形」を描く。

- 一. 教室を画面の空間と見立て、動きを身体表現する。
- 二. 「動きを表す表現」を見て学ぶ。
- 三. 学生一人一人が色画用紙を選ぶ。
- 四. 動きを表す。
- 五. 鑑賞し、さらに描き進める。
- 六. 鑑賞

題材4は、「折り鶴」を描く。

- 一. 「折り鶴を描く」を見て学ぶ。
- 二. 鶴を折る。
- 三. 折った鶴が輝いて見える色画用紙を選ぶ。

四. それぞれのテンポで描く。

五. 鑑賞し、さらに描き加える。

六. 鑑賞

題材5は、改めて「植物」を描く。描画体験での学びを活かして描く。

最後に、「レポート課題」として、「植物1と2」の絵を比較、検討した。

『成果』として、97%の学生が自らの表現の向上を認めたとし、その要因を、①子ども理解の観点を対象理解に重ね合わせる。②心と身体を動かす。③多視点から対象を捉える。以上の3点と評した。

『課題』についての記述は見当たらなかった。

河合の『目的』は、アナログ表現の体験から学生の感じ方や捉え方を分析し、抽象的表現の効用について検討するものである。

『方法』には、複数回の調査を実施する。

第1に「絵を描くことに対する意識調査」として、好悪心理についてアンケート調査を行う。

第2に「アナログ表現の体験」として、5回の実践を行う。実践内容を以下に記す。

1回目は、テーマを感情の「喜・怒・哀・楽（リラックス）」とし、オイルパステル（16色）で画用紙（八つ切りの半分）に描く。

2回目は、「ゴールデンウィークの思い出」とし、水彩絵の具（12色）で画用紙に描く。

3回目は、まず「最近嬉しかった出来事」をオイルパステルで画用紙に描く。次に「Happy」を水彩絵の具で各自の手のひらに描き、障子紙に写し取る。

4回目は、「優しい・寂しい・激しい」「梅雨」とし、のり絵の具を使って手でビニールシートに描く。前者は単色で、後者は複数の色で描き画用紙に写し取る。

5回目は、「今日の気分」としオイルパステルで画用紙に描く。

最後に、「アナログ表現に関するアンケート」として、感想を調査し、体験前後の意識の変化を分析した。

『成果』として、「好き（得意）」「どちらでもない」「嫌い（苦手）」の3群とも肯定的な感想が多く、「嫌い（苦手）」の結果に着目すると、①自由感や開放感が得られる。②「面白い」、「楽しい」、「描きやすい」。以上の2点で、受け入れられやすい描画の表現方法と評した。

『課題』として、抽象的な表現方法の理解を深め

るためのより丁寧な指導の研究や、多くのサンプル数の収集と分析を挙げている。

主観性に富む描画題材を「イメージや想像力」で描き出す葉山と、非再現的な事物を「感情や記憶」で表現する河合の教育実践は、絵を描く表現活動において「感覚的」なアプローチ法と言える。その特徴は、描画による内面性の表出を目的とし、描写力を求めない造形遊びを方法とする。成果と課題において、模範作品とは比べずに、本人の達成感の度合いという主観的な指標によって評価される。

利点として、描写の困難さを感じにくい手法により苦手意識の克服へと間接的に働く有効性が期待できる。一方、河合は、問題点について『恣意的な「表出」から意識的な創作的働きがなされ、「表現」にまで高めていくこと』¹⁸⁾とし、注意を促した。

以上の「抽象系」に見る指導法を「感覚」に特化した描画方法とする。

5. 技法系

「技法系」では、佐善圭¹⁹⁾と吉垣隆雄²⁰⁾の研究について取り上げる。

佐善の『目的』は、学生の造形意識の改善と苦手の克服のために、「創作の楽しさ」、「表現の素晴らしさ」などを体感し、子どもの喜びに共感できる豊かな感性を身につけることについて実践、検証するものである。

『方法』は、「シルクスクリーン版画」を実施する。これは、幼児造形での「ステンシル（型染め）技法」を応用したものの一つであるが、印刷素材を紙から衣類へと置き換えることで、図画工作の一般的な課題にファッションの要素も含んだ演習として変化させ、版画技法の習得へと関連づけている。

第1に「授業実践」として、4回の授業を行う。実践内容を以下に記す。

「1回目」は、Tシャツのアイデアについて、構想スケッチを描く。デザイン決定の後、下絵を清書する。

「2、3回目」は、フィルムに下絵を転写し、カッターで切り抜く。そして、スプレーのりを使ってフィルムをスクリーン枠に貼り付ける。

「4回目」は、Tシャツ素材に印刷する。

第2に「鑑賞活動」として、毎年、学生全員による作品展「真夏のTシャツ展」を開催し、鑑賞会を

行う。

最後に、授業の効果についてアンケートによる意識調査を行った。

『成果』として、「積極的に参加しなかった」や「つまらなかった」と答えた学生が4年間を通じて一人もいないなど、多くの学生が積極的、かつ楽しみながら制作活動に望んでいたことを数値として客観的に確認できたとまとめた。

『課題』について、鑑賞教育に関する方法や回数などの改善と研究の継続を挙げている。

吉垣の『目的』は、幼児教育の現場において指導者に必要な表現力のスキルアップとして、モダンテクニックを取り上げ、表現方法の効果について実践、検証するものである。

『方法』は、「スパッタリング」を中心に実施する。これは、描画に対する技術を補填するとともに、遊び感覚で楽しみながら制作することを重要な過程とし、その過程から生まれた成果（作品の出来）への満足感を目標とした。また、①表現の知識や技術にとらわれない。②発想の斬新さや個性を発揮する。③デザインの美しさ（大衆に語りかける装飾性）をもつ作品作り。以上の3点に重点を置いている。

第1に「いろいろな表現技法を学ぶ」として、7つのモダンテクニックの演習を行う。

第2に「スパッタリングによる描画制作」として、スパッタリングの演習を行う。授業展開を以下に記す。

- 一、スパッタリングの特徴
- 二、マスキングによる効果と演習
- 三、マスキングの型紙効果
- 四、マスキング（型紙）の制作
- 五、スパッタリング作業とマスキング作業
- 六、コントラストへの応用、等
- 七、作品の鑑賞

最後に、「学びのレポート」として、制作後の感想などをまとめた。

『成果』として、全体の85.1%^{注3)}の学生が教材に対して苦手意識の解消に繋がったとした。

『課題』について、用具の清掃作業にかかる手間、マスキング作業による乾燥時間の制約、制作内容と授業時間の改善、型紙に用いる用紙の選定を挙げている。

各々に絵画技法を用いて「楽しさや感性」を重視

する佐善と、「プロセスや個性」を重んじる吉垣の教育実践は、絵を描く表現活動において「過程的」なアプローチ法と言える。その特徴は、自由な描画活動と技法の習得を目的とし、描写力を問わない造形遊びを方法とする。成果と課題において、模範作品とは比べずに、本人の満足度の度合いという主観的な指標によって評価される点で「抽象系」に近い。

利点として、「抽象系」と同様に、描写の困難さを感じにくい手法により苦手意識の克服へと間接的に働く有効性が期待できる。一方、金山和彦は、問題点について『表現の意味付け・見立てその動機となる経験を「物質的な偶然性」と結びつける作業が加わるべき』²¹⁾とし、注意を促している。

以上の「技法系」に見る指導法を「過程」に特化した描画方法とする。

6. 素材系

「素材系」では、辻本恵²²⁾と船木美佳²³⁾の研究について取り上げる。

辻本の『目的』は、クレパスの特徴や用途に関する知識の理解と、技法や表現方法に関わる技能の習得、さらに苦手意識の解放を目指して、抽象的表現の体験から学生の感じ方や学び方を分析し、保育者育成での造形活動について考察するものである。

『方法』には、4つの活動を実施する。

第1に「描画材に対する意識調査」として、描画材についてアンケート調査を行う。

第2に「感覚を開くクレパスのエクササイズ」として、クレパスの感覚を呼び起こし、タッチや混色の知識や技能を得るために、1枚の紙に様々な線や点、塗り方を試す。

第3に「点・線・面の抽象的表現の演習」として、エクササイズでの様々な表現を思い返し、クレパス(16色)を使って画用紙に平面表現の基礎的要素である点・線・面を用いて、抽象的表現を行う。

最後に、「学びのアンケート」として、感想を調査し、体験前後の意識の変化を分析した。

『成果』として、描画材料の使用法や表現法への学びが描く行為の楽しさに関連した。また、抽象的表現が描く具体像をもたない非再現的活動であることで、クレパスという色の塊を掴み、握って、描くといった感触や描画感覚の直接的で身体的な関わりを深める効果が確かめられたとした。

『課題』について、さらなるデータの収集と分析

を挙げている。

船木の『目的』は、美術に対する苦手意識の背景を分析し、意識の変化に有効性が見られた独自のプログラムの方法やねらいを検討して、今後の課題について論考するものである。

『方法』は、「木炭画による闇ワーク」を実施する。これは、木炭特有の質感を利用してその粒子の痕跡に「見えたもの」を次々と追うもの。流動する画面の表情に自己の感覚を開いて即興で対応し、作者本人が連続して「何が見えたか」を記録する手法である。

第1に「初回アンケート」として、美術に対する好悪心理などについて意識調査を行う。

第2に「闇ワーク」として実践を行う。実践方法を以下に記す。

- 一、木炭で木炭紙全体を黒く塗る。
- 二、指や手型をつけるなど、遊びながら描画をする。
- 三、「二」で自分の画面に浮かんだものに形を与え、消す+塗るを繰り返す。
- 四、画面に浮かんだ形や、連想されたことを記録する。

最後に、「最終回アンケート」として、自身が気づいたことなどを調査し、授業前後の意識の変化を分析した。

『成果』として、約70～80%の学生が意識の変化を感じており、直近の2019年度では83%以上にのぼったとした。なお、「表現の自由さ」と「自身の変化」の言及が多いことが分かった。

『課題』について、意識変化の要因の一つに挙げたクラスの「空気感」に関して、今後は「創造性と心的環境の相関性」として注目し、個人同士で高まる「創造性がある場」のような環境作りを挙げている。

個々に描画材料を使って「素材感や手触り」に着目する辻本と、「質感やタッチ」を意識した船木の教育実践は、絵を描く表現活動において「身体的」なアプローチ法と言える。その特徴は、自由な描画活動と材料・道具の学びを目的とし、描写力を問わない造形遊びを方法とする。成果と課題において、模範作品と比べない点、主観的な指標によって評価される点などから、「抽象系」や「技法系」との類似性が高い。

利点もまた「抽象系」・「技法系」と同じく、描写

の困難さを感じにくい手法により苦手意識の克服へと間接的に働く有効性が期待できる。他方、その多数の共通点は、河合と金山が指摘する問題点に当てはまる一つの可能性としても注視される。

以上の「素材系」に見る指導法を「身体」に特化した描画方法とする。

7. 壁面装飾系

「壁面装飾系」では、上浦千津子²⁴⁾と山中慶子²⁵⁾の研究について取り上げる。

上浦の『目的』は、造形表現に関して有意義かつ継続的に学ぶ方途として、学習プログラムを構築・実践し、今後の課題について考察するものである。

『方法』には、2つの活動を中心に実施する。

第1に「絵に対するアンケート」として、絵を描くことについて意識調査を行う。

第2に「学習プログラムの実践」として、誕生日表の制作を行う。授業展開を以下に記す。

- 一. 誕生日表の説明、見本の提示、作り方の工夫と課題
- 二. 制作の班分けと誕生日の表の提示
- 三. アイデアの生成と準備、計画
- 四. 制作にあたっての留意点の説明
- 五. グループに分かれての制作議論と制作
- 六. 作品の展示と鑑賞

調査において、素描に関する事項を調べる点。制作において、アイデアスケッチのために基礎レッスンのトレーニングを行う点や、誕生日表制作のために一点・二点透視図法の演習を行う点。また、鑑賞において、色や形、技法、素材を観点別に分析するなど、美術の専門的内容を主眼とする指導方針が特筆できる。

『成果』として、学生は楽しんで制作活動を行ったとし、協同制作と個人制作の両方の側面を補いつつ学習を進めることができたとした。そして、準備や計画を行うことの重要性や、子どもの立場に立ちイメージを広げることの大切さに触れることができたとしている。

『課題』について、ドリッピングや草木染めなどを導入した学習プログラムの構築、さらに子どもを介した実践活動を挙げている。

山中の『目的』は、2年間で保育士としての造形に関する知識と技能の習得、および表現に関わる楽

しさの育成を目的とし、意識調査から苦手克服の手立てとなる授業内容について検討、実践するものである。

『方法』には、4つの活動を実施する。

第1に「造形表現に関する意識調査」として、好悪心理などについてアンケート調査を行う。

第2に「授業実践A」として、「手形アート 蝶を作ろう」を行う。以下、授業内容をまとめた。

- 一. 1回目では、見本を示す。
- 二. 色合いを決め、手形をスタンプする。
- 三. 2回目までに羽や体の素材を集める。
- 四. 2回目では、制作した作品を壁面に飾る。

第3に「授業実践B」として、「雨の日のお気に入り」を行う。

- 一. 1回目では、クレヨンと水彩絵の具を使った「はじき」の技法遊びで、傘を作る。
- 二. コーヒーフィルターと水性ペンを使った「にじみ」の技法遊びで、傘をもつ人形を作る。
- 三. 2回目までに傘の裏側に貼る素材を集める。
- 四. 2回目では、制作した作品を壁面に飾る。

最後に、「授業後アンケート」として、再度、好悪心理などを調査し、授業前後の意識の変化を分析した。

『成果』として、全体において、造形表現に対する「好き」が1年生は25%、2年生は38%増加し、「嫌い」が1年生は15%、2年生は20%減少した。^{注4)}

また、作品を全体の一部分として飾ることに抵抗を感じない学生が多いと推測し、壁面装飾の掲示は、表現方法やアイデアの多様さに気づききっかけになるとした。

『課題』について、「基本的な線画（イラスト）の描き方の習得」を挙げている。

多人数の制作活動を「コミュニケーションやチームワーク」で取り組む上浦と、「個人制作の集積」で取り扱う山中の教育実践は、絵を描く表現活動において「共感的」なアプローチ法と言える。その特徴は、目的・方法ともに切口は多様であるが、成果と課題において、学生間で目標を設定し、本人らの充実感の度合いという主観的な指標によって評価される点、そして、何より得意・苦手を助け合う集団活動という点において共通している。

利点として、苦手分野を補填し合える手法により苦手意識の克服へと間接的に働く有効性が期待できる。なお、目立つ欠点が散見されない点についても

特記しておきたい。

以上の「壁面装飾系」に見る指導法を「共感」に特化した描画方法とする。

Ⅲ. まとめ

苦手意識の克服と解消に関連する「絵を描くこと」の教育実践について分析と考察を行った結果、本論では、「写実的」「科学的」「簡易的」「感覚的」「過程的」「身体的」「共感的」とする、7つの表現方法および指導方法を明らかとした。

この多種多様な表現手段の在り方は、まさに絵を描くという最も根源的な造形表現の一つが有する「奥深さ」に起因するものと言えよう。

しかし注意すべきは、ここでの学習対象者が保育者養成の学生という点にある。すなわち、「美術を専門としない」学生達が学習し、習得する造形表現の一部分であって、学生にとってその負担の質と量は、実に膨大である。

同時に、巧拙性・正誤性、或いは喜びなどの評価の観点も明らかになった。どちらにしても、すべての制作活動またはその各場面において、従来の価値観を求められることに対する学生のプレッシャーは計り知れない。

最後に、保育者養成での造形教育において、「絵を描くこと」の負担やプレッシャーを考慮した段階的な到達目標について考えてみたい。

第1に「標準的到達点」として、多種多様なアプローチによる絵画体験を通して、絵を描くという経験値を増やすことである。

第2に「理想的到達点」として、何か一つの「得意」や「好き」など自己を肯定する気持ちを再発見し、養い育むことである。

これは、描画活動を通じて、子ども達の一人一人と向き合う心の準備を整えること。そして、自信をもって、自分なりに精一杯の「楽しい」や「面白い」を表現し、伝えられること。その支援と指導の在り方を意味している。

つまり、「絵を描くこと」において、表現方法の種類が豊富であるからこそ、たくさんの絵画体験を介して自分自身に一つの誇りを感じ得ること。さらに、自らの「居場所」と思える表現との出会いがかけがえのない財産となり、結果的に苦手意識を克服

し、その解消へと結実するのではないかと考えるのである。

島田由紀子は、「キミ子方式」や「酒井式描画指導法」を例に挙げて、メソッドによる描画の指導法について次のように問題提起している。

『幼稚園教育要領や小学校学習指導要領にメソッドによる描画指導法を照らし合わせて考えると、沿ったものではないことがわかる。幼稚園教育要領や小学校学習指導要領は「上手に絵を描くこと」をねらいや目標としていないからである。』²⁶⁾

本論での結果を踏まえた、以下の私見を結びの言葉とする。

「具象・抽象を問わず、一種類の描画方法、および指導方法による感性や個性の表出には、限界が存在している。絵画表現とは、幾つもの方法と手段、さらに、ものの見方や考え方から表現されることによって、その核心へと近づくことができる。それゆえに、十分な絵画体験と自信や誇りに裏付けられた自尊心が苦手意識の克服と解消の鍵となるのではないだろうか。」

今後の課題として、本研究を一過性の検証としない定期的、長期的な研究の継続と経過報告を行う必要性が挙げられる。特に、直近の課題として、「ICT関連」や「オンライン授業」などの影響が容易に予測される。これまで以上に、慎重かつ丁寧に苦手意識と向き合っていきたい。そして、「一日でも早く、一人でも多く」の学生の絵を描くことに対する苦手意識の克服と解消を目指したい。

謝 辞

本論文を執筆するにあたり、英文抄録の作成に御協力を賜りました CHOWDHURY Mahbubul Alam 教授（福岡女子大学国際文理学部）に心より感謝申し上げます。

脚注・引用文献

注1) 下線部の数値は、掲載されたデータから筆者が算出した。

注2) 下線部は、掲載されたデータから筆者が抜粋し、算出した。

注3) 下線部の数値は、掲載されたデータから筆者が算出した。

注4) 下線部は、掲載されたデータから筆者が算出した。

- 1) 照沼晃子：保育課程履修大学生の図画・工作に対する意識に関する一考察。美術教育学：美術科教育学会誌。20：264，1999
- 2) 花田千絵：保育者を目指す学生の授業「図画工作」への取り組みについての一考察－苦手意識と学習到達度の相関関係について－。作大論集。8：264，2018
- 3) 泰田久史：学生が意欲的に取り組める図画工作授業の工夫について－苦手意識を克服する視点－。宮崎学園短期大学紀要。10：202，2018
- 4) 清見嘉文：造形表現領域指導法に関する一考察－苦手を克服する授業づくり－。広島文化学園短期大学紀要。53：45-46，2020
- 5) 船木美佳：教科「美術」の苦手意識解消を目的とするアートプログラムに関する考察。浦和論叢。64：80，2021
- 6) 山中慶子：保育学生の造形表現における苦手意識克服のための授業実践－造形表現に関する意識調査からの考察を通して－。長崎女子短期大学紀要。46：120，2021
- 7) 山中慶子：保育学生の造形表現における苦手意識克服のための授業実践－造形表現に関する意識調査からの考察を通して－。長崎女子短期大学紀要。46：122-123，2021
- 8) 宿輪忍生：人物描画の指導法について－本学児童教育学科学学生の実例より－。紀要。43：43-52，2008
- 9) 花田千絵：保育者を目指す学生の授業「図画工作」への取り組みについての一考察－苦手意識と学習到達度の相関関係について－。作大論集。8：255-264，2018
- 10) 長根利紀代：イメージと表現－学生の自由画を通して－。研究紀要。22：65-86，2000
- 11) 高橋弥生，おかもとみわこ：保育者をめざす学生のもつ動植物に対するイメージに関する研究Ⅱ。目白大学短期大学部研究紀要。44：127-140，2008
- 12) 高木義栄，木下智章，林幸治：保育者志望学生の生物形態認識への過去の自然体験の影響。近畿大学九州短期大学研究紀要。46：15-30，2016
- 13) 宮崎百合：幼児教育保育学科学学生の動物の描写について－パンダの塗り絵に見られる事例－。鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要。76：53-56，2018
- 14) 泰田久史：学生が意欲的に取り組める図画工作授業の工夫について－苦手意識を克服する視点－。宮崎学園短期大学紀要。10：201-212，2018
- 15) 清見嘉文：造形表現領域指導法に関する一考察－苦手を克服する授業づくり－。広島文化学園短期大学紀要。53：

43-52，2020

- 16) 葉山登：保育者養成課程における図画工作教育の題材開発 (1) 子ども理解の観点から描画題材を構想する。川村学園女子大学研究紀要。22 (1)：171-195，2011
- 17) 河合規仁：臨床美術アートプログラムにおける「アナログ表現」の研究－「アナログ表現」における抽象的表現の効用－。東北文科大学・東北文科大学短期大学部紀要。2：17-23，2012
- 18) 河合規仁：臨床美術アートプログラムにおける「アナログ表現」の研究－「アナログ表現」における抽象的表現の効用－。東北文科大学・東北文科大学短期大学部紀要。2：22，2012
- 19) 佐善圭：保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅲ－シルクスクリーン版画制作を導入した造形指導の実践的研究－。研究紀要。45：41-52，2012
- 20) 吉垣隆雄：幼児造形表現教育における授業実践報告－スパッタリングによる表現方法と考察－。大阪千代田短期大学紀要。47：113-121，2018
- 21) 金山和彦：保育における技法あそびについて－保育実践現場への質問紙調査をもとに－。美術教育。1998 (277)：59，1998
- 22) 辻本恵：保育者養成における造形活動についての考察－描画に対する「苦手意識の解放」を目指して－。神戸教育短期大学教育実践研究紀要。2：17-23，2020
- 23) 船木美佳：教科「美術」の苦手意識解消を目的とするアートプログラムに関する考察。浦和論叢。64：79-90，2021
- 24) 上浦千津子：お誕生日表の作成と鑑賞による造形の学び。中国学園紀要。13：157-166，2013
- 25) 山中慶子：保育学生の造形表現における苦手意識克服のための授業実践－造形表現に関する意識調査からの考察を通して－。長崎女子短期大学紀要。46：117-132，2021
- 26) 島田由紀子：幼児、児童のメソッドによる描画指導法の研究。和洋女子大学紀要。57：93，2017

On the Educational Practice of "Drawing" Related to Overcoming and Eliminating the Feeling of Weaknesses in the Area of "Expression" - Focusing on Childcare Worker Training -

Kimihiko Washizaki *

< Abstract >

This paper deals with “drawing”, which is one of the main causes of student’s perception of their weakness at artistic expression, and examines educational practices aimed at “overcoming and eliminating the perception of weaknesses” among students aiming to become childcare worker. In addition, based on the analysis and consideration, points to be considered in future educational activities will be examined.

First of all, they were classified into seven systems according to the method of practice: “drawing”, “form recognition”, “illustration”, “abstraction”, “technique”, “material”, and “wall decoration”. Then, the 13 research subjects were sorted into four categories, “Purpose”, “Method”, “Results” and “Problem”, and the characteristics of each system were verified.

As a result, we clarified seven approaches to express and teach drawing: “realistic”, “scientific”, “simple”, “sensory”, “process”, “physical”, and “sympathetic”. In addition, we examined the “standard goal” and “ideal goal” as step-by-step goals for “drawing” in art education for childcare workers.

Keywords: childcare worker training, artistic expression, perception of weaknesses, overcoming and eliminating, drawing

* Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University Junior College